

私の半生

全日本柔道連盟顧問審判員
会津若松柔道会顧問

伊藤

剛 ①

●私の生い立ち

私は関東大震災の翌年の大正十三(一九二四)年、河沼郡若宮村五ノ井中島三九一(中新田)で、農業を営んでいた父徳重の五人兄妹の四男として生まれた。男子の末子として甘え五歳まで母の乳を欲しがったのに、六つ違いの妹に奪われた。祖母は「女子が生まれた」と、うれしさで村中に触れ回ったが、私は寂しかった。

父はきちようめに独学する努力家で、祖父の「百姓には学問は要らない」との言葉に敢然と勉学し、明治四十(一九〇七)

年、郡山まで往復百四十キロを歩いて教員試験を受け、見事合格した。当時は汽車が開通してはいたが、猛反対の祖父は旅費も与えなかった。父は帰路に疲れ果てて猪苗代湖畔で休んだが、空腹を満たした代田饅頭(まんじゅう)の味は忘れられなかったという。

父の初任は二本松小学校だった。祖父は農家が優先と再三、父を説得した。確かに田畑三畝、口雄幸首相が東京駅頭で凶弾に

多忙極めた農家経営

世界恐慌で不景気が増幅

余の経営は、猫の手も借りたいほど多忙を極めていた。幼い叔父の千守娘と下男とを雇ってはいたが、農家の宿命的な後継者として父の存在も重要だった。それに養蚕や兼業の「染屋」も抱え、農繁期の繁忙さはそれは大変だった。

父はそんな経歴もあつてか皇居を守る近衛兵に選抜された。そんな中、明治天皇の崩御に際した乃木希典大将夫妻の殉死は

した。折しも役場吏員が横領、村長は財政再建のために再三、父に収入役就任を求め、これに応じて就任したが、農村の分解の流れは止まらなかった。

とがでない農家を、私は次第に嫌いになっていった。青年団は重労働を和らげようと五、十のつく定休日を取り締まったが、私はひたすら雨の臨時休業の「触れ太鼓」を待った。

た。



昭和7年ごろに家族と撮った記念写真。前列右端が私

休日のがが家は楽しかった。午前中は祖父が越中小原節をハミングしながら盆栽を、父は早稲田講義録や物書きに熱中し、豊兄は座敷で六段などの尺八演奏で悦に入り、母と兄嫁は決まって髪洗いを済ませ、その後ごちそうづくりに励んだ。午後は蓄音機で古賀メロデーや「東京・さくら音頭」など大正ロマン残照の至福を満喫した。

小学校入学時、満州

働けども生産過剰からくる減益に農民は打つ手もなく、それでも手抜きはできなかった。世界経済恐慌がさらに不景気を増幅した。わが子の面倒をみるこ

事変が勃発(ぼつぱつ)、音丸の「満州想えば」は満蒙開拓の夢をかき立て、寿々木米若の浪花節「佐渡情話」には恋愛の素晴らしさを感じた。(題字は筆者)